「鹿鳴」の日中比較

――『万葉集』と『文選』を中心に――

佐久間　有　美

はじめに

中国と日本における「鹿」の描かれ方は大きく異なる。具体的には、中国の文学では、鹿は、主君が臣下をもてなす君臣関係や、天子の威厳を示す政治・権力関連で描かれることが多いようである。一方、日本の文学、特に和歌においては、鹿は、妻を恋うという描かれ方をされている。このように、この両国の鹿の描かれ方は異なっており、従来は、和歌に見られる鹿の妻恋は、日本独自のものとみなされてきた。

しかし、上代の日本の妻恋（つまこい）の鹿は、本当に日本独自のもので、中国からの影響は一切ないのだろうか。私は、これに疑問を持った。そこで、中国の『文選』と日本の『万葉集』に登場する「鹿」の用例を調査し、その影響関係の有無を検討していきたいと思う。『文選』と『万葉集』を取り上げたのは、共に、古い時代の詩文を集めた代表的な文学アンソロジーであるからである。

一、研究史

従来の研究では、『万葉集』における「鹿」の描かれ方、及びそれと中国文学との影響関係について、どのように論じられてきたのだろうか。先行研究をいくつか時代順に列挙し、検討してみよう。

・岡崎義恵「萬葉集に現れた季節」
（『古代日本の文藝』弘文堂書房　一九四三年）
「鹿鳴」は詩経にも見え、志那趣味でもあるけれども、又日本固有のものとも考えられる。日本では鹿の声は妻恋うものと感じられ、萩は鹿の妻と考えられ、歌人の情を動かしている事が多い。（旧かな・旧字は現行のものに改めた）
・吉村誠「『万葉集』鹿鳴歌『今夜は鳴かずい寝にけらしも』の一解釈」
（『群馬県立女子大学　国文学研究』創刊号　群馬県立女子大学国語国文学会　一九八一年）
……大半が妻問いに鳴く鹿として、鹿鳴は『万葉集』中に描かれていることがわかる。
これは、しかも漢詩文の影響でもなく、日本固有のとらえ方であろう。莫大な中国の典籍を博捜せずに早急に結論を出すことは、さけなければならないが、万葉に特に影響を与えているとされている六朝時代の詩文において、鹿鳴が妻問いの意味で用いられているものはない。
・中西進「雄略御製の伝誦」
（『万葉集の比較文学的研究（上）』講談社　一九九五年・初出『萬葉』萬葉学会編輯委員会　四二号　一九六二年）
巻十の分類は「詠鹿鳴」とあって、単に「詠鹿」とか「詠鳴鹿」とかではない。この用語は勿論詩経の語で、懐風藻にも見られ、既に十分浸透していた知識であったが、編者の一括して収める意図には、十分詩経の連想があったといい得るであろう。……家持の題詞にも「鹿鳴歌」（8一六〇二・一六〇三）となって現われ、編纂なり分類なりの態度としては中国的趣味性を除く事は不可能であろう。
・馬駿「漢籍との比較から見た『鹿鳴』の歌――その巻頭性と表現性を中心に――」
（『国語国文研究』一〇五号　北海道大学国語国文学会　一九九七年）
「鹿鳴」＝妻恋という発想は管見の限りでは漢土にはないらしい。……「鹿鳴」＝妻恋という発想は、上代日本人が独自に持つに至ったもので、その生成は自然界への観察や農耕生活の体験によっておのずから導かれたものと見て然るべきだろう。

・井上さやか「景物としての〝鳴く鹿〟――詠物歌と物色の倭製――」
（『万葉古代学研究所年報』四号　奈良県万葉文化振興財団万葉古代学研究所　二〇〇六年）
〝鳴く鹿〟についても『詩経』の鹿鳴詩において、鹿が鳴く様が友を呼ぶこととして擬人化されていたことに、影響を受けた可能性は高い。しかし、そうした影響下にありながらも、万葉集中では、独自の〝鳴く鹿〟の概念に基づく表現の類型が形成されたとみられる。……万葉集の後期において、〝鳴く鹿〟の詠題化と擬人化を伴う類型化がみられた。そこに、「鹿鳴」の語彙と詠物の発想という中国文学の影響は窺えるが、ひじょうに限定された範囲であることが確認できた。
・郭穎、倪晨「和歌における鹿の鳴き声について――『万葉集』『新撰万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』を中心に――」
（『北研學刊』一三号　広島大学北京研究中心　二〇一七年）
中国と比べ、和歌には、恋愛などより感情的な要素や、日本の独特な表現が見られる。『万葉集』における鹿の鳴き声について、日本独特の「萩」、または「妻恋ひ」「妻問ひ」「妻呼び」との組み合わせで、妻を求める恋愛関係の歌が圧倒的多い。
・近藤信義「『鹿鳴』詩と鹿鳴歌のはざま」[1]
（『上代文学』一二六号　上代文学会　二〇二一年）
「鹿鳴」詩から万葉集の鹿鳴歌へは、単線的な影響下で繋がらないことはすでに云われていることではあるが、万葉歌の鹿から古今歌の鹿へも単線的ではなかった。しかし、「鹿鳴」詩の詩趣は長く底流しながら、たとえば、伊豫親王の山荘での遊宴設営に見るように、その文化的メッセージを流し続けているように思われる。奈良朝の歌題の「鹿鳴」と「鳴鹿」は、その歌題によって歌趣を育ててきたし、……
以上、主要な先行研究を挙げてみた。こうして、従来の研究を見渡してみると、万葉集における鹿が妻恋をする描かれ方は、日本独自の用法であるとみなされてきたようだ。[2] ただし、岡崎義恵、中西進、井上さやかの三氏は、「鹿鳴」という語彙は中国からの影響であると指摘している。[3] また、中西氏は、万葉集に見られる鹿の歌の編纂態度は、『詩経』の

「鹿鳴」詩の影響があるとした。さらに井上氏は、詠物の発想という点で、中国からの影響を指摘している。

このように、中国からの影響については、「鹿鳴」という語彙や、鹿の歌の編纂態度、詠物の発想など、部分的なものへの指摘に止まっているとしてよい。妻恋をする鹿それ自体については、中国からの影響は、あまり指摘されていないようである。

そこで本稿は、まず、「鹿鳴」に限らず、日中の「鹿」がどのように描かれているかを見てみたい。そのため、中国の『文選』と日本の『万葉集』における「鹿」の用例を調査する。そしてその結果を踏まえ、日本の妻恋に鳴く鹿と中国文学との影響関係について考えてみたいと思う。

二、『詩経』の「鹿鳴」詩

『文選』と『万葉集』との比較をする前に、『詩経』「小雅」の「鹿鳴」詩について検討しておこう。この「鹿鳴」詩は、後世における鹿の描かれ方の有力な典拠となっているからである。その際、あわせて「毛伝」も引用しておく。「毛伝」とは、漢の毛亨らによる『詩経』の注釈である。古くから本文と共に読まれ、上代の日本に受容されていた可能性は高い。

次は、「鹿鳴」詩と「毛伝」の第一章である。なお、私の解釈を明示するため、あえて訳文を添えたが、これは高田眞治『漢詩大系　第二巻　詩経　下』を参考にしつつ、適宜修正したものである。

呦呦鹿鳴　食野之苹
呦呦として鹿鳴き　野の苹を食む
我有嘉賓　鼓瑟吹笙
我に嘉賓有り　瑟を鼓し笙を吹かん
吹笙鼓簧　承筐是将
笙を吹き簧を鼓し　筐を承げて是れ将ふ
人之好我　示我周行
人の我を好し　我に周行を示せ

（毛伝）呦呦然鳴而相呼。
（毛伝）呦呦然として鳴きて相呼ぶ。
ゆうゆうと鹿が鳴いて（仲間を呼び集め）、野の草を食べている。我の元に、よき賓客たちがやってきた。
（ともに宴をして）瑟をならし、笙を吹いてもてなそう。

笙を吹き簧を鳴らして、筐を引き出物として配ろう。賓客たちは我を親しく思い、（そして）我に正しい道を示してほしい。

（毛伝）（鹿が）ゆうゆうと鳴いて仲間を呼ぶ。

このように「鹿鳴」第一章では、第一行目で「ゆうゆうと鹿が鳴いて（仲間を呼び集め）、野の草を食べている」という鹿の描写があり、それを喩えとして、第二、三行目で、（その鹿と同じように）主君が賓客を招き、楽器を弾き、贈答品を配って、楽しくもてなす様子が詠まれている。第四行目では、主君たちが賓客たちに、天下を治めるための正しい道を示すよう促している。以降省略したが、第二章、第三章も、鹿が鳴いて仲間を呼び集める様子を喩えとし、賓客をもてなそうとすることが詠まれている。

こうした楽しい宴の様子から、中国ではこの詩は、「主君が臣下をもてなす」という、麗しい君臣関係の意味で解釈されてきた。

一方「毛伝」に、「（鹿が）ゆうゆうと鳴いて仲間を呼ぶ」とあるのにも注意したい。後で詳しく触れるが、鹿が仲間を呼ぶ点が、日中の「鹿鳴」の影響関係を探る上での大きな手掛かりとなってくるからである。

以上を踏まえた上で、『文選』と『万葉集』における「鹿」の描かれ方について、用例を検討してゆこう。

三、『文選』における「鹿」の描かれ方

『文選』とは、六世紀前半に成立した中国の詩文集で、周の時代から梁の時代までの代表的な詩文を集めた文学アンソロジーである。日本の天平時代以前に渡来し、上代の日本の文学作品に大きな影響を与えている。

『文選』における「鹿」の用例を、以下のように調査してみた。まず、『文選』本文中の「鹿」字、及び、部首が「鹿」で、鹿に準ずる動物や、雌の鹿、鹿の群を表している字を拾い上げ、その意味を調べた。

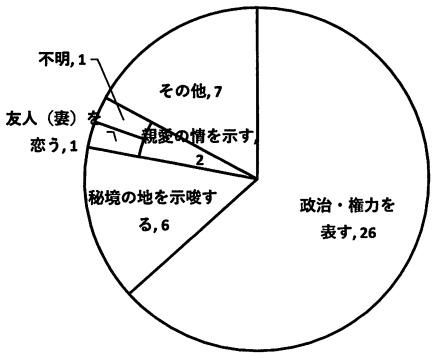
ただし、「鹿」に関係する字が含まれていても、地名や、動物の鹿とは別の意味を指しているものは除く。例えば、地名の「鉅鹿」、「鹿丘」、魚の名前の「鹿頭魚」、植物名の「鹿葱」などは除いた。

また、同じ篇の中に複数の「鹿」が出てくることがある。

例えば「麋鹿」など連続して登場した場合や、同じ場面や内容、例えば狩猟について述べている段落に、複数の「鹿」が登場した場合は一つの要素として数える。一方、同じ篇の中でも、別の場面にそれぞれ「鹿」が登場した場合は別の要素としてそれぞれ数えている。そのため、篇と要素の数は一致しない。

グラフの要素名は、鹿の行動がどのような比喩になっているかを表している。例えば、天子に鹿が狩られる様子は、

『文選』における「鹿」の描かれ方



31 篇 41 要素

※グラフ中の数字は、要素の数を表す。

「政治・権力を表す」に含めている。

以上の方針で調査した結果、『文選』における「鹿」に関する用例は、三一篇四一要素が見つかった。

まず、最も多い「政治・権力を表す」について見ていく。多くは射られる鹿を叙することによって、政治・権力の強さを示すのである。この要素は、二六例見られた。ここでは、四例挙げる。以下の『文選』の訳は、『全釈漢文大系　文選』（「文章」は小尾郊一氏、「詩」は花房英樹氏）を参考にし、適宜修正したものである。

一例目は、『文選』巻七の司馬相如「子虚上林賦」の一節を挙げる。ここでは、主君が多くの馬車や兵士、騎馬を率いて、狩りをしている様子が描かれている。

王車駕千乗、選徒万騎、畋於海濱。列卒満澤、罘網弥山。掩兎轔鹿、射麋脚麟。

王　車は千乗を駕し、徒は万騎を選び、海濱に畋す。列卒　澤に満ち、罘網　山を弥ふ。兎を掩ひ鹿を轔み、麋を射て麟を脚どる。

主君は、車万乗をひきい、多くの騎馬の兵士を選んで、浜辺で狩りをされます。兵士たちは沢に満ち溢れ、（獲

物を捕えるための）網は山を覆います。兎は網でとらえられ、鹿は馬車でひかれ、麋は射られ、麟は捕えられました。

本文中の「麋」は、オオジカと訓じられる。鹿の一種だろう。「麟」は、「雄の大鹿」だと考えられる。いずれも狩られる生き物として、鹿が描かれているのに注意しよう。

このように、王侯貴族によって鹿が狩られる、もしくはそのように解釈できる用例は、「政治・権力を表す」の中で最も多く見られるものである。

二例目に、『文選』巻五二の班彪「王命論」の一節を挙げる。

游説之士、至比天下於逐鹿、幸捷而得之。不知神器有命、不可以智力求。

游説（ゆうぜい）の士、天下を鹿を逐ふに比し、幸ひに捷（はや）くして之を得るとするに至る。神器（じんき）　命有り、智力を以て求む可からざるを知らず。

遊説の士は、天下を取ることは鹿を追うこと（のように考えて）、幸いにも（足が）速いから天下を得たのだと思っているのだ。天子の位は天命によるものであり、知力によって（天子の位を）求めることができないのを（遊説の士は）知らないのだ。

この文では、鹿を追いかけることが、天下を取ることの喩えとなっていると述べる。そしてその上で、その考えは間違っている、と批判しているのである。班彪はこのように批判するが、逆に言えば、それだけ遊説の士の間では「鹿＝帝位」の考え方が有力だったのだろう。

一例として『史記』の用例を示すと、「淮陰侯伝」に「秦失其鹿、天下共逐之」（秦　其の鹿を失ふや、天下　共に之を逐ふ）とある。[4] そして『史記集解』は、「以鹿喩帝位也」（鹿を以て帝位に喩ふるなり）と注する。ここでも「鹿」は、帝位を表す動物に比擬されていたのである。

三例目に、『文選』巻二七の魏武帝「短歌行」の一節を挙げる。この詩の傍線部は、先に紹介した『詩経』の「鹿鳴」詩をそのまま引いており、仲間、つまり才能ある部下を求めて、天下にのりだそうとする、武帝の政治的野心を歌いあげている。

青青子衿　悠悠我心
青青たり　子が衿（えり）　悠悠たり我が心

但為君故　沈吟至今
　但君が為の故に　沈吟して今に至る
呦呦鹿鳴　食野之苹
　呦呦として鹿鳴き　野の苹を食む
我有嘉賓　鼓瑟吹笙
　我に嘉賓有り　瑟を鼓し笙を吹かん

（『詩経』の「子衿」に）「青々として君の服の襟、悠々たるわが想い」とあるが、そのように私は、君のごとき才能ある部下を求めようと、今日まで懸命に考えてきた。（『詩経』の「鹿鳴」にも言うではないか）「ゆうゆうと鹿が鳴いて（仲間を呼び集め）、野の草を食べている。我の元に、よき賓客たちがやってきた。（ともに宴をして）琴をならし、笙を吹いてもてなそう」と。

四例目に、『文選』巻三七の曹植「求通親親表」の一節を挙げる。この文は、皇族である曹植が、皇族間の自由な交流を認めてほしいと、魏明帝（実の甥）に求めたものである。やはり、「鹿鳴」詩を引用しているのに注意しよう。

遠慕鹿鳴君臣之宴、中詠棠棣匪他之誡、下思伐木友生之義、終懐蓼莪罔極之哀、毎四節之会、塊然独処。

遠くは鹿鳴君臣の宴を慕ひ、中ごろ棠棣匪他の誡を詠じ、下には伐木友生の義を思ひ、終には蓼莪罔極の哀を懐き、四節の会毎に、塊然として独り処る。

私は『詩経』の「鹿鳴」にある、「君臣の宴」を恋しく思い、次に『詩経』の「棠棣」にある「兄弟とは親しくあるべき」との戒めを詠じました。また、『詩経』の「伐木」にある「朋友、故旧を親しむ」意味を思い、最後には、『詩経』の「蓼莪」にある、「父母に孝行できない哀しみ」をいだいたものでした。それなのに実際は、四季が巡ってきても、私は一人ぽつんといるのです。

このように、皇族である曹植が、天子のおそばに仕え、高尚な議論をしたいと願っている。これは、親族の交流を願ってはいるが、ただそれだけではない。親族を大切にすることは徳教の根本であるとし、天子にも親族を大切にし、立派な政治をしてほしいと願っているのである。これも、「政治・権力」に関わる用例だと言ってよかろう。

さて、『文選』の中の「鹿」の第二として、「鹿」が「秘境の地を示唆する」について見てみよう。この要素では、六例みられた。ここでは、一例のみ挙げる。出所は、『文選』巻

五五の劉孝標「広絶交論」の一節。貴族社会に絶望した劉孝標が、世俗から逃れて暮らそうと宣言する場面である。

是以耿介之士、疾其若斯、裂裳裹足、弃之長鶩、独立高山之頂、歓与麋同羣、皦皦然絶其雰濁。

是を以て耿介の士は、其の斯くの若きを疾み、裳を裂き足を裹み、之を弃てて長鶩し、高山の頂に独立し、麋鹿と羣を同じうするを歓び、皦皦然として其の雰濁を絶つ。

そこで、清らかで節義を重んじる者は、このような汚れた世を憎み、衣服を引き裂いて足を包み、（汚れた世を）捨てて長駆し、独り高い山の頂に立って、麋鹿と群を同じくすることを喜び、きっぱりと、この乱れて汚れた世間からは逃れることにしました。

右の用例は、俗世間から足を洗い、鹿がいるような自然の中で生きていくと語っている。隠遁を宣言するのに、「鹿と群れを同じくする」と語っているのに注意しよう。また、この要素の他の用例として、人が離れ荒廃した地や、人の手が入らない奥地を描く際に鹿が登場したもの、隠者の性質を鹿で喩えたものなどがある（引用略）。

次に、『文選』中の「鹿」の第三として、「親愛の情を示す」についてである。これは、量は少ないが、「友人（妻）を恋う」という内容をもち、とても重要なものである。そのため、ここでは挙げず、第五章で改めて取り上げることにしよう。

以上、『文選』中の「鹿」の用例を調査した。これをまとめると、第一の「政治・権力を表す」用例が圧倒的に多く、「鹿＝帝位」の例も見られた。さらに第二の、「秘境の地を示唆する」も、広い意味では政治に関係する用例だと言ってよい。つまり、『文選』における「鹿」の描かれ方は、政治に関係する用例が大半であることに注意しよう。

四、『万葉集』における「鹿」の描かれ方

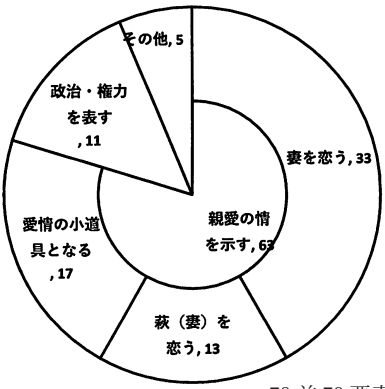
次に、『万葉集』における「鹿」の用例について検討していく。調査は以下のように行った。

歌中に「鹿」が登場する歌や、鹿が詠まれていると解釈できる歌を調べた。また、『文選』の時と同様に、部首が「鹿」で、鹿に準ずる動物などを示しているものも調べた。ただし、「鹿」が含まれている語でも、動物の鹿とは別の意味を指し

ているものは除いた。例えば、地名の「鹿島」や、神の名の「鹿島の神」、害獣を退ける火を焚く小屋を指す「鹿火屋」といったものは除いた。

また、『文選』の時と同様に、歌中に複数の鹿が見られる場合がある。そのため、歌の数と要素の数は一致しない。加えて、『文選』と同様に、グラフの要素名は、鹿の行動がどのような比喩になっているかを表している。なお、『万葉集』全体の傾向を探ることが目的であるため、第一期から第四期の区別はせずに集計した。

『万葉集』における「鹿」の描かれ方



78 首 79 要素

※グラフ中の数字は、要素の数を表す。

以上の方針で調査した結果、『万葉集』では、「鹿」が登場する歌が七八首七九要素見られた。

まず、最も多いのは、「鹿」が「親愛の情を示す」を表すケースである。内三例のみは、兄弟や子供に対する愛情だったが、それ以外は全て恋に関する用例である。

「親愛の情を示す」に関してはより細かく分類を行い、「妻を恋う」、「萩（妻）を恋う」、「愛情の小道具となる」の三通りとした。（「萩（妻）を恋う」は「妻を恋う」との関わりが深いため、「妻を恋う」の次に配置している）。

では、用例を見ていこう。第一に「妻を恋う」（鹿が妻や恋人などを求めている歌[5]）についてである。この要素は、三三例みられた。ここでは三首挙げよう。以下に挙げる歌の表記は、すべて伊藤博『萬葉集釋注』による。

山彦の　相響（あひとよ）むまで　妻恋ひに
鹿（か）鳴く山辺に　ひとりのみして
（巻八・大伴家持・一六〇二）

このころの　秋の朝明（あさけ）に　霧隠り
妻呼ぶ鹿の　声のさやけさ
（巻十・作者不詳・二一四一）

妹を思ひ　寐の寝らえぬに　秋の野に
さを鹿鳴きつ　妻思ひかねて
（巻一五・作者不詳・三六七八）

一六〇二番歌は、大友家持が久邇京に住んでいたときに詠んだ歌である。伊藤博氏は「妻恋に鳴く鹿の声に、独り奈良の都を離れて住む妻恋しさを託した歌」と述べておられた。[6] また、ここでの鹿の詠みは「カ」としている。「鹿」という語について、『新編　大海言』によれば、「鹿」の総称は「カ」で、「シカ」は雄、「メカ」は雌を指し、後世は雌雄ともに「シカ」と言うようになった、としている。[7] ここでは雌雄の総称の「カ」であるが、家持が妻と離れて暮らす寂しい思いを鹿が妻を求めて鳴く様子に重ねていると考えられるため、この鹿は雄鹿であろう。

二一四一番歌は、「鹿鳴を詠む」という題詞に収められた歌群の一首である。「鹿鳴を詠む」には、鹿が鳴く歌が一六首収められている。また、一六〇二番歌にも、「大伴宿禰家持が鹿鳴の歌一首」という題詞がつく。これらの題詞にある「鹿鳴」は、第一章で引用した中西進氏の論によると、編纂、分類態度に『詩経』の影響があるという。

三六七八番歌は、「引津の亭に船泊りして作る歌七首」の内の一首である。この歌も、一六〇二番歌と同様に妻と離れているわが身を嘆いており、雄鹿もまた、妻が恋しくて鳴いているのだ。

第二に、鹿が「萩（妻）を恋う」についてである。これは、一三例見られた。武田祐吉氏は、「萩＝鹿の妻」とする考えが当時の人の常識であった、と述べておられる。[8] また、伊藤氏は、「『さを鹿』は『萩』の夫であるとも見られた」と述べておられる。[9] 本論文ではそれに従い、歌の中に「鹿」と「萩」が登場した際は、「萩＝鹿の妻」として扱うことにした（萩が秋の景物として描かれている場合は除く）。以下、二首挙げる。

我が岡に　さを鹿来鳴く　初萩の
花妻とひに　来鳴くさを鹿
（巻八・大伴旅人・一五四一）

奥山に　棲むといふ鹿の　宵さらず
妻どふ萩の　散らまく惜しも
（巻十・作者不詳・二〇九八）

一五四一番歌は、萩の花を妻と見立てて「花妻」と詠み、

それを求めて雄鹿が鳴いている。二〇九八番歌は、「妻どふ萩」とあるため、萩が鹿の妻とされていることがわかる。

このように、鹿の歌には、妻を恋う鹿や、萩を妻と見立ててそれを恋う「雄鹿」が詠まれている。東光治氏によれば「萩の花が咲き乱れる頃になると、鹿の発情期に入って、あちらでもこちらでもヒョ、ヒョ、ヒューと鳴き出す。……鹿の鳴声を聞くことは秋の季節に入った事の知らせでもあった。集中には秋の季節の象徴としてサヲシカが多く詠まれている」（旧かな・旧字は現行のものに改めた）という。[10] つまり、秋は鹿の発情期で、雄鹿が雌鹿を求めて鳴き、なおかつ萩の咲く季節であったため、雄鹿が多く詠まれたのであろう。

第三に、「愛情の小道具となる」についてである。これは一七例見られた。

この要素は、愛情を表す歌の中に「鹿」が登場したものを分属させた。ここでは一首挙げる。

夏野行く　小鹿（をしか）の角の　束の間も
　妹が心を　忘れて思へや
（巻四・柿本人麻呂・五〇二）

五〇二番歌は、伊藤氏によれば、「鹿の角は夏の初めに生えそめる」という。[11] このように、鹿の性質を喩えとして用いている。

以上「愛情の小道具となる」では、直接的に愛情を表すわけではないが、鹿の性質や行動が男女の恋に関わる歌の中に、喩えとして詠み込まれていることがわかった。

次に、鹿が「政治・権力を表す」についてである。一一例見られた。ここでは、一首のみ挙げる。

やすみしし　我が大君　高光る　我が日の御子の　馬並（な）めて　御狩立たせる
若薦を　猟路の小野に　鹿（しし）こそば　い匍ひ拝（はい）め（おろが）　鶉こそ　い匍い廻（もとほ）れ　鹿（しし）じもの　い匍ひ拝み　鶉なす　い匍ひ廻り　畏みと　仕へまつりて　……
（巻三・柿本人麻呂・二三九）

この二三九番歌は、「長皇子、猟路の池に遊す時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首」とあり、長皇子の狩猟の様子を讃えている。「鹿こそば　い匍ひ拝め」について、『萬葉集①新編日本古典文学全集6』の頭注によれば、「獲物の鹿や鶉が皇子の前に並べられているのを見て詠んでいるのであろう」と述べている。[12] つまり、人麻呂ら家臣は、狩られて皇子の前

に並べられている鹿のように、匍うようにお辞儀をして皇子を敬い、そばにお仕えする、という意味だろう。

このように、大がかりな狩りの様子や、王侯貴族が鹿などを狩る様子が描かれ、詠者はそれを讃えている。これは、第三章、『文選』の「政治・権力を表す」において挙げた、狩られる鹿の用例に似ており、中国からの影響がうかがえる。（ただし、中国の場合、ただ天子を讃えているのではなく、天子の奢侈を諷諫していることが多い。例えば、第三章で挙げた「子虚上林賦」も諷諫の意味が込められている[13]）。

なお、『万葉集』には、『文選』「王命論」にあるような、鹿を追うことが天下を争うことを表す用例や、鹿が帝位を象徴する用例は見られなかった。むしろ、二三九番歌では、鹿が這いつくばるように仕える様子が描かれており、鹿が臣下の喩えとなっていることに注意しよう。

以上、『万葉集』における鹿の用例を検討した。その結果、愛情関係の歌、とくに「鹿が、妻または萩を鹿の妻と見立てて、それを恋う」といった歌が半数以上であることがわかった。また、直接的に愛情を表しているわけではないが、鹿が愛情を表す歌の中に詠まれている用例も多くみられた。一方、中国に見られるような「政治・権力を表す」鹿は少数であった。

以上、日中の鹿の描かれ方を調査してみた。これをまとめると、中国は政治関係、日本は愛情関係が、それぞれ突出して多いと言ってよかろう。

五、日中の「鹿鳴」の影響関係

このように、中国と日本の「鹿」の描かれ方は、確かに異なっているといってよい。しかし、そうではあるが、中国の「鹿」の用例をより詳細に見ていくと、日本の妻恋の鹿との繋がりがほの見えると考える。

まず、中国の「鹿」、特に、「鹿鳴」の典拠である『詩経』の「鹿鳴」詩をもう一度見てゆこう。第二章で見たように、この詩は従来、主君が臣下をもてなす内容であると解釈されてきた。しかし、この詩をよく観察してみると、必ずしも君臣関係ばかりを表しているわけではない。というのも、「毛伝」の「呦呦然として鳴きて相呼ぶ」の文をじっくり検討してみると、君臣関係以外の解釈も見えてくるからである。

「毛伝」の傍線部の「相呼ぶ」とは、仲間を呼ぶということである。つまり『詩経』の「鹿鳴」詩は、もとは鹿が仲間を呼びあって、共に草をはむという意味だった。仲間を呼ぶというのは、もちろん「主君が臣下を呼び、宴をする」という意味にも理解できる。しかし、この部分だけを素直に読めば、この「相呼ぶ」は、主君以外の者とも解釈できるのではないか。

例えば、第一章で引用した井上さやか氏の論では、「鳴く鹿」について、「『詩経』の鹿鳴詩において、鹿が鳴く様が友を呼ぶこととして擬人化されていたことに、影響を受けた可能性は高い」と指摘されていた。確かに、友を呼ぶとも解釈できよう。しかし、ただそれだけでなく、妻、恋人とも解釈することができるのではないか。私は、上代の日本人は、この「相呼ぶ」を「妻を呼ぶ」と拡大して解釈し、それを自分たちの和歌に取り入れたのではないかと考えるのである。[14]

それでは、中国において、鹿が妻を呼ぶと解釈できる「鹿鳴」の用例は、ほかに見られないのだろうか。そこで、先ほど重要とした『文選』の「親愛の情を示す」用例を、検討してみたいと思う。「友人（妻）を恋う」（第三章のグラフ）の用例として、蘇武の「詩四首」（巻二九）の第一首目を挙げてみよう。これは、漢に帰国できることになった蘇武が、友人の李陵と別れる際に贈ったとされるものである。李陵が蘇武に贈った「与蘇武三首」とともに、二人が贈答しあった作とされている。いわば男同士で惜別の詩を送りあったわけだ。

骨肉縁枝葉　結交亦相因
　骨肉　枝葉に縁り　結交も亦た相因る
四海皆兄弟　誰為行路人
　四海　皆兄弟　誰か行路の人為らん
況我連枝樹　与子同一身
　況や　我　連枝の樹にして　子と一身を同じうするをや
昔為鴛与鴦　今為参与辰
　昔は鴛（えん）と鴦（おう）と為り　今は参（しん）と辰（しん）と為る
昔者常相近　邈若胡与秦
　昔者（むかし）は常に相近づけど　邈かなること胡と秦の若し
惟念当離別　思情日以新
　惟念ふ　離別に当り　思情　日に以て新たならんを
鹿鳴思野草　可以喩嘉賓
　鹿　鳴いて　野草を思ふ　以て嘉賓に喩ふ可し

我有一罇酒　欲以贈遠人
　我に一罇（いっそん）の酒有り　以て遠人（たびびと）に贈らんと欲す
願子留斟酌　叙此平生親
　願はくは　子　留りて斟酌（しんしゃく）し　此の平生の親を叙べよ

血肉を分けた兄弟は、同じ幹から出た枝や葉のようなもの。常に交際して、互いに寄り合います。古くから「四海の内はみな兄弟」と言うように、いったい誰が見知らぬ行路の人でありましょうか。まして私達は、同じ樹から生えた連なる枝であり、一心同体の関係ではありませんか。

かつては、私達は仲睦まじい鴛鴦のようでしたが、今は参と辰の星のように、遠く離れ離れになろうとしております。かつては、いつも親しく寄り添い合っていましたが、今ははるか北方の胡の国、西方の秦の国のように隔たれようとしています。

この離別にあたり、互いを思い慕う心が日ごと日ごとに深まっていくことを願う次第です。

鹿が鳴いて仲間を呼び、野の草をともに食べようとしています。そのように私も君を客とみなして別れの宴をしましょう。私のもとに一かめのお酒がございます。この酒を遠く旅立つ貴方に贈りましょう。どうかお願いです。今しばらくここにとどまって酒を酌み交わし、これまでの友愛の情を語り合おうではありませんか。

ここで傍線を引いた「鹿鳴いて野草を思ふ……」を見てみよう。ここは、鹿が鳴いて仲間を呼ぶように、私達もつどって別れの宴をいたしましょう、という意味である。この詩について、第一章でも挙げた馬駿氏の論文では、次のように述べておられる。

宴会という場を共有する点において従来の「鹿鳴」の詩と一致するものの、終始、別離の耐え難い空気に包まれるので、「別宴」と言うべきものにふさわしい。これは「鹿鳴」に関する新しい理解であり、また、新しい表現でもあると言えよう。……今日を限りに、平素の親しみを胸に暖め、目前の宴会は「別宴」と言いながらも、君を少しでも長く引き留めたい、という朋友関係を示す「鹿鳴」であって、「小雅」（筆者注：『詩経』の「鹿鳴」詩のこと）以来の上下関係を協調する「鹿鳴」ではない。

馬氏が指摘されるように、この詩では『詩経』の「鹿鳴」

詩を典拠として使ってはいても、君臣ではなく「友人を求めて宴を開こう」という意味になっている。この「友人」を求める鹿は、「君臣」のような政治的な関係ではなく、「友人」という個人的な関係である。とすれば、日本の「妻」を恋う鹿にも近づいてくるのではないか。また、別れを悲しむ宴というのも、日本の、鹿が人恋しさに妻を求めて鳴く様子に、接近しているように思われる。このように、蘇武の詩は、中国の鹿鳴の描かれ方と、日本の、鹿が妻恋をする描かれ方との、橋渡しをしているように考えられるのである。

さらに、この李陵と蘇武が贈答しあった詩は、実はこの二人の作ではなく、古来より無名氏の作だろうと疑われてきている。例えば、五世紀の顔延之は、『庭誥』にて、これらの詩は「総雑不類にして、是れ仮託ならん。尽くは［李］陵らの制する非ず」と断じている。[15] つまり、李陵と蘇武の別れの詩に対して、仮託の疑いを呈しているのである。

実際、この詩は訳を読めばすぐわかるように、武骨な男同士の別れというより、むしろ肉親、恋人、または夫婦の別れの歌とすべきだろう。さらに、蘇武の詩の中に使われている言葉、例えば、一行目の「骨肉」は血を分けた身内であり、兄弟を意味している。また、四行目の「鴛与鴦」（鴛と鴦と）は、つがいのおしどりであり、仲睦まじく離れることない夫婦のたとえである。このように、友人の別れとするよりもむしろ、夫婦、恋人、兄弟との別れと考える方がふさわしいだろう。すると、この詩を見た当時の日本人が、蘇武と李陵の別れの詩ではなく、夫婦の別離の詩と解釈したとしてもおかしくないと考えられる。

また、蘇武の詩は「詩四首」とあるように、先に挙げた詩以外に三首詠まれている。どれも別離の情を歌っているが、特に第三首目は妻にあてた詩と解釈できる。傍線部は、妻との別れに関わる部分を示す。

結髪為夫妻　恩愛両不疑
結髪して夫妻と為り　恩愛　両つながら疑はず
歓娯在今夕　嫣婉及良時
歓娯　今夕に在り　嫣婉（えんえん）　良時に及ぶ
征夫懐往路　起視夜何其
征夫は往路を懐ひ　起ちて夜の何其（いかなる）かを視る
参辰皆已没　去去従此辞
参辰　皆已没しぬ　去（い）で去でて此従り辞せん

行役在戦場　相見未有期
　行役して戦場に在れば　相見えんこと未だ期有らず
握手一長歎　涙為生別滋
　手を握りて一たび長歎すれば　涙は生きながら別るるが為に滋し
努力愛春花　莫忘歓楽時
　努力して春花を愛し　歓楽の時を忘るる莫れ
生当復来帰　死当長相思
　生きては当に復た来り帰るべし　死するも当に長く相思ふべし

髪を結い上げて元服して夫婦となってから、互いの愛情を疑うことなどなかった。だが（夫婦としての）楽しい（暮らしは）今宵限りなので、今宵こそ仲睦まじく夫婦として過ごそう。

出征のために旅立つ私は、旅行く道を思い、起き上がって、（今の）夜の（景色）はどうだろうかと見てみることにした。（すると）参と辰の星はみな落ちてしまって、（夜明けに近づいている）。いざ立ち上がり、ここから別れることとしよう。

（私が）徴兵されて戦場にいることになれば、（君と再び）逢えるのはいつになるのかわからない。君の手を握りしめ、ひとたび深く嘆くと、生きながらに（君と）別れてしまうことを思って、涙があふれてくるのだ。

（君は）努めて、今の華やかで（美しい）姿を大切にして、（私と共に過ごした）喜びあい、（そして）楽しかったあの時間を、（どうか）忘れないでほしい。（もし、私が）生きていたら（君の元へ）また帰って来よう。（たとえ、私が）死んでしまっても、どこまでも（君のことを）思い続けよう。（『文選』・巻二九・蘇武「詩四首」）

このように、三首目は「夫婦」という語が見られ、一首目以上に夫婦の別れがはっきり表面に出ている。とすると、上代の日本人がこの「詩四首」全体を、夫婦の別れの詩として読んだ可能性は、十分あるように思う。

周知のように、『文選』は日本でよく読まれてきた。その『文選』中の蘇武の詩が、こうしたものであれば、それは日本の和歌文学に影響を与え、「鹿＝妻恋」として利用されるようになったのではないだろうか。

ほかにも、日本の妻恋の鹿に影響を与えたと考えられる、中国の用例がいくつかある。傍証として挙げておこう。

まず、『後漢書』の用例である。以下の訳は、渡邊義浩、堀内淳一ほか『全釋後漢書　第十二冊』を参考にし、適宜修正したものである。

鸞回翔索其群兮　鸞（らん）は回翔して其の群を索（もと）め
鹿哀鳴而求其友　鹿は哀しみ鳴きて其の友を求む

鸞鳥は飛びめぐって群れを求め、鹿は悲しみ鳴いて友人を求める。

（『後漢書』・巻二八下・桓譚馮衍列傳第一八下）

これは、孤独でさみしいことを、「鹿が悲しみ鳴いて友を求めている」様子で表している。「友人」を求める用例ではあるが、日本の鹿が妻を求める描かれ方に近づいているのではないだろうか。また、悲しんで鳴いている点も、鹿が人恋しさに妻を求めて鳴く様子に近いと考える。

次に、鮑照の「代別鶴操」を挙げてみよう。第一章で引用した吉村誠氏の論では、「万葉に特に影響を与えているとされている六朝時代の詩文において、鹿鳴が妻問いの意味で用いられているものはない」としていた。また、第一章で引用した馬氏の論や、さらに孫偉氏の「『万葉集』における『花鳥』と恋情との結びつき――『雄鹿』と『秋萩』との取り合わせを中心に」（『学芸古典文学』一二号　東京学芸大学国語科古典文学研究室　二〇一九年三月）においても、漢籍において鹿が妻恋をする用例は見当たらないとしていた。

確かに、漢籍において、「鹿」が「妻」や「妻恋」のニュアンスで用いられた用例は見当たらない。しかし、以下に挙げる鮑照の「代別鶴操」には、鳴く鹿の雌雄はわからないものの、つがいを求めて鳴く様子が詠まれている。

鮑照とは、五世紀の中国、南朝宋の詩人で万葉歌人よりも古い人である。「代別鶴操」とは、表面上は鶴の夫婦の別れを描いているが、もちろん実際は、人の悲しい別れを詠んだ詩である。以下の訳は、鈴木敏雄『鮑参軍詩集』を参考にし、適宜修正したものである。

雙鶴俱起時　徘徊滄海間
雙鶴（そうかく）　俱に起つ時　徘徊す滄海の間

長弄若天漢　軽軀似雲懸
長弄は天漢のごとく　軽軀は雲の懸かるに似たり

幽客時結侶　提攜遊三山

幽客　時に侶に結び　提攜して三山に遊ぶ
青繻淩瑶台　丹羅籠紫煙
青繻は瑶台を淩ぎ　丹羅は紫煙を籠む
海上悲風急　三山多雲霧
海上　悲風急に　三山　雲霧多し
散乱一相失　驚孤不得住
散乱して一たび相失へば　孤に驚くも住むるを得ず
緬然日月馳　遠矣絶音儀
緬然として日月は馳せ　遠きかな音儀を絶つ
有願而不遂　無怨以生離
願ふことも有るも遂げず　怨む無きも以て生きながら離る
鹿鳴在深草　蟬鳴隱高枝
鹿は鳴きて深き草に在り　蟬は鳴きて高き枝に隱る
心自有所存　旁人那得知
心に自づから存する所有るも　旁人　那ぞ知るを得んや

つがいの鶴が共に飛び立つとき、東海の大海原を飛び回る。（つがいの鶴が）長く鳴く声は天の川のようであり、軽やかなその身体は雲が浮かんでいるようである。

仙人が、その時に仲間と集まって、手を取り合って三山で遊んでいた。青い生糸が（神女が住まう）瑶台よりも高く飛んでいき、赤い鳥網は仙界を包んでいった。

海上では、急に悲しい秋風が吹き、三山では（仙気ただよう）雲霧が立ち籠めた。（つがいの鶴が）散りぢりになって一たび互いを見失うや、孤独さに気づいても、もうどうしようもない。

そのまま日月が過ぎ、遠ざかって声も姿形もわからなくなる。再会したいと願っても、それは叶わず　怨みもないのに生き別れになってしまうのだ。

連れを失った鹿なら（絶望のあまり）鳴いて深草の中にたたずむだろうし、連れを失った蝉なら（絶望のあまり）鳴いて高い枝の中に隠れるだろう。心中では連れを思ってはいるが、どうして他人はそれに気づこうか。

このようにこの詩は、つがいの鶴が連れを失った詩である。この詩の主体はつがいの鶴であるが、傍線部で「鹿は鳴きて深き草に在り　蟬は鳴きて高き枝に隠る」と述べているのに注意しよう。「鹿と蝉がつがいを失ったらどうするだろうか。鹿だったら、連れを失えば、（絶望のあまり）鳴いて深い草の中に入るだろう」という意味であり、鹿の別れが比擬の一

つとして詠まれている。つまり、「鹿鳴」という語を使ってはいるが、それは、君臣関係ではなく、いなくなった妻もしくは夫を求めている意なのである。このようなところから、日本の妻恋との繋がりが、見いだせるのではないだろうか。[16]

以上から、中国の「鹿鳴」には、君臣関係だけでなく、妻や友人といった親しい者を求める用法も確認できた。とりわけ、『文選』の蘇武の詩、『後漢書』の用例、鮑照の「代別鶴操」は、いずれも人と人との悲しい別れを描いており、日本における、鹿が人恋しさに妻恋をする和歌と繋がりがありそうだ。そして、上代の日本人は、秋に発情期を迎える鹿の生態を観察しつつ、これらの用例等に影響を受け、鹿が妻恋をするという発想を得たのではないだろうか。

注

（1）近藤信義氏は、「桓武天皇遊猟歌の一問題――喩としての『鹿鳴』詩――」（『立正大学国語国文』三九号　二〇〇一年三月）においても、以下のように述べられている。

桓武天皇歌に色濃く見いだせる詩経鹿鳴詩の受容的要素が万葉集歌には見られないということであって、ここに万葉集、とその時代における漢詩文世界とが異和の中にあるという相を見出すのである。

（2）鉄野昌弘「万葉集自然表現事典」（『國文学　解釈と教材の研究』三三巻一号　學燈社　一九八八年一月）、田中夏陽子「『萬葉集』の獣歌にみる音の表現――鹿の歌を中心として――」（『高岡市万葉歴史館論集5　音の万葉集』高岡市万葉歴史館　笹間書院　二〇〇二年三月）も、万葉集における鹿の妻恋は、日本独自の用法である、と述べている。また、前野直彬『新装版　風月無尽――中国の古典と自然』（東京大学出版会　二〇一五年二月）も、中国の鹿について「日本の鹿とは、どうも鳴きかたが違っていたらしい」と述べている。

（3）井上さやか「鳴く鹿を詠む歌――詠物長歌の位相――」（『美夫君志』七一号　美夫君志会　二〇〇六年二月）においても、同様の指摘をしている。

（4）水沢利忠『史記十（列伝三）新釈漢文大系　第九〇巻』明治書院　二〇一六年十月

（5）鹿が妻を求める様子として、妻を「呼ぶ」「恋ふ」「問ふ」と表現されていた。これらの表現の違いについては、第一章で取り上げた郭穎と倪晨両氏の論文や川村幸次郎「万葉集の鹿――万葉人の美意識――」（『解釈』二五巻一一号　解釈学会　一九七九年一一月）に詳しい。

（6）伊藤博『萬葉集釋注　四』集英社　一九九六年八月　六八三頁

（7）大槻文彦『新編　大言海』富山房　一九八二年二月　九〇

八頁

（8）武田祐吉『増訂　萬葉集全註釋　七　巻の八・九』角川書店　一九五六年九月　三七〇頁

（9）伊藤博『萬葉集釋注　八』集英社　一九九八年一月　一八五頁

（10）東光治『續萬葉動物考』人文書院　一九四四年一二月　一〇〇、一〇一頁

（11）伊藤博『萬葉集釋注　二』集英社　一九九六年二月　四〇四頁

（12）小島憲之、木下正俊ほか『萬葉集①　新編日本古典文学全集6』小学館　一九九四年九月　一六九頁

（13）例えば、「子虚上林賦」の別の一節では、天子の狩猟を讃えつつも、「夫終日馳騁、……不顧衆庶、忘国家之政、貪雉兎之獲、則仁者不繇也」（もし（天子の狩猟が）、終日、獲物を追って馬を走らせ、……民衆を顧みず、政治を忘れて、兎や雉といった獲物をむさぼることであるなら、それは、仁徳の高い者はやらないのです）と語っている。つまり天子の豪勢な狩猟は、民の生活を圧迫するものとして批判されているのである。

（14）上代日本人の『詩経』の「鹿鳴」詩の解釈については、近藤信義氏も、第一章で挙げた論文にて、万葉集八四番歌の長皇子の歌（引用略）に対し、以下のように述べている。

題詞の「佐紀宮」は長皇子の宮と考えられる。年長の志貴皇子を客人として迎えての挨拶歌であったようだ。「妻恋ひに鹿鳴かむ山そ高野原の上」は「佐紀宮」からの風景と思われるが、趣向は「鹿鳴」詩を踏まえ、歌句にも取り入れ、客人を迎えた歓びを表したもので……「妻恋ひに」は、「我有嘉賓」の詩句を翻訳的・注釈的に理解したもので、長皇子のオリジナルとは云えず、この時代に共有されていた理解であったと思われる。

（15）戸田浩暁『文心雕龍（上）　新釈漢文大系　第六四巻』明治書院　二〇〇七年二月

（16）鮑照の文集は『日本国見在書目録』の「別集」の項に「鮑集十」（「鮑照集十巻」の意味）と記されている。（参考：矢島玄亮『日本国見在書目録――集証と研究――』汲古書院　一九八四年九月）。すると、鮑照の「代別鶴操」は、日本人に受容されていた可能性が高い。

（中京大学大学院文学研究科
日本文学・日本語文化専攻修了生）